

吉野作造のドイツ留学（二）

今野 元

三、ドイツ／ヨーロッパの実地検分

吉野作造がドイツを中心とする留学生生活で心血を注いだのは、「實地を見聞することであった。吉野は数多くの施設を貪欲に見学し、その観察眼は王侯貴族から市井の一般人にまで及んだ。本論では、①宗教、②君主制、③社会主義運動、④婦人運動、⑤日本・西洋比較の五点に分けて、留学中の吉野の言動を整理してみたい。

①吉野作造が最も熱心に探求したのがドイツの宗教事情であった。本郷教会の雑誌『新人』で健筆を揮っていた「翔天生」が、ドイツのキリスト教事情に興味を懷いたのは自然の数であろう。吉野が最初に訪れた教会は、日記で辿れる範囲では、ハイデルベルク旧市街の聖霊教会であった（117）。

プロテスタントの吉野作造は、やはりプロテスタントイイズムの教会堂を多く訪れている。日記に記録が残っているのは、シュヴェルムのルター教会（160）、マインツのプロテスタント教会（162）、ヴェルツブルクのクロスター教会（289）、ベルリンのヴィルヘルム皇帝記念教会（273）などである。一九一二年（明治四五年）三月三日に訪れたベルリン大聖堂では、吉野はこう感想を述べている。「流石ニ皇帝ノ大金ヲカケテ作ラレシモノトテ壯麗眼ヲ驚カスモノアリ BudapestノStephans Kircheニモ劣ルマジク見ユ」（275）。シュトラスブルクでは、衛戍教会を

訪れている(295)。吉野のプロテスタント教会訪問はドイツを離れてからも続き、ナンシーのプロテスタント教会(304)、ロンドンのセント・ポール寺院(390)、シティー・テンプル(392)、ウエストミンスター寺院(392)、シカゴのバプティスト教会(403)などに足を向けている。

教会堂訪問と並行して、吉野作造はプロテスタンティズムの名所旧跡を巡礼し、宗教改革の時代に思いを馳せた。「プロテスタント」の語を生んだ帝国議会の開催地シユパイエルでは、吉野は事件を記念して建立されたプロテスタント教会を訪れた(155)。ルターが帝国議会の皇帝カール五世や選帝侯たちの前で「私はここに立つ」と啖呵を切ったとされるヴォルムスでは、吉野はロマネスク様式のカトリック大聖堂には目もくれずに、その近くのルター記念碑だけを見学し、「壮大当国第一ナリ」とその威厳を称えている(162)。一九一二年(明治四五年)四月三日に訪れたヴィッテンベルクでは、ルターやメランヒトンの旧蹟を隈なく訪ねている(282)。更に吉野は翌日、三十年戦争でプロテスタント支援を掲げてドイツに侵攻したスウェーデン王グスタフ・アドルフが、ヴァレンシユタイン麾下のカトリック軍を破って戦死した古戦場リュッツェン(一六三三年)を訪ねようとした(天候不順で断念)(283)。同年四月一四日には、吉野はエルフルトのアウグスティヌス派修道院でルターの居住した部屋を見学したあと、同日ヴァルトブルク城でルターが新約聖書を独訳した部屋を見学している(287)。

吉野作造は教会堂や名所旧跡の観光だけでなく、ドイツ・プロテスタンティズムの生きた現実に肉薄しようとした。吉野は一九一〇年(明治四三年)七月、つまりハイデルベルク到着直後に、早々とハイデルベルク大学の「基督教青年会」(YMCA)に入っている。ドイツの基督教青年会はベルリンに本部があり、世界の基督教青年会と繋がっている。吉野はキリスト教国ドイツの大学でありながら参加者が僅か一七、八人であること、思想は陳腐だが、ドイツの学生には珍しく性風俗が乱れていないことに驚いている(「滞徳日記」381-383)。キリスト教青年会はその後も吉野の活動拠点の一つとなり、彼はヴェルツブルクでもヴァインでもこれに参加した。一九一一年(明治四四年)七月一三日にヴァインでは、吉野は語学能力不足を理由に固辞したにも拘らず、参会者に強く請われて日本の基督教青

年会について講演を行った。初めてのドイツ語講演を準備なしで一時間半もさせられたため、このとき吉野は「大ニ冷汗ヲ流」したという(198—199・222)¹。やがて吉野は、友人ハーネの伝で *Entwicklung des Christentums in Japan* なる論文を *Das Volk* という雑誌(未確認)に掲載することになる(228)。この論文の執筆は、吉野がハイデルベルク時代の一九一〇年(明治四三年)一〇月五日から進めてきたものだった(131)。外にも吉野は、一九一三年(大正二年)二月一九日に再びシュヴェルムのプロテスタント教会で牧師の説教を聞き(372)、また四日後に同地で堅信礼を見学している(373)。一九一〇年(明治四三年)一月二十五日、ドイツでの最初の降誕祭に、吉野はシュヴェルムのハーネ家での祝宴に参加し、翌日教会でのプロテスタンティズムの児童礼拝に参加している(160—161)。吉野はここで、日本の教会の説教は長くて閉口するが、未信者相手のため伝道目的で熱が入っている、ドイツでは説教が短くて良いものの、聴衆がみな信者のため内容が陳腐だとの感想を懐いている(161)。ベルリンでは吉野の活動も活撥になった。一九一二年(明治四五年)三月一三日、吉野はイエルサレム教会で中国や日本についての講演を聞き、上映された「幻灯」のなかに知り合いの「高野牧師」の姿を目にしている(276)。三月一九日には、吉野は「自由宗教派」の集会でフリードリヒ・ナウマンらの演説を聞いた。「夜ハ自由宗教派ノ演説会ノ傍聴ニ行ク Friedrich Naumann 毛弁士ノ一人ナリシガ軀ノ大キイ顔ノ四角ナ色ノ黒イ頑丈ナ一癖アリサウナ男ナリ 演説ハ雄大ニシテ巧者満場魅セラル、ノ観アリ 筆ヲ取ツテモ一代ノ雄日本ナラバ三宅先生ノ弁ノ雄大ナルモノカ」(277—278)。一九一二年(明治四五年)四月一〇日、美しい溪谷を縫ってヴァイマル駅に着いた吉野は、ザクセン＝ヴァイマル・アイゼナハ大公国の宮廷説教師ヴィルフリート・シュピンナー(スピネル)を訪ねた。このシュピンナーは一八八五年から一八九一年まで日本に滞在していた宣教師だが、丁度宮廷に伺候するところで吉野は十分に話せなかった。代わりに吉野は、ヴァイマルで開催中の全プロテスタント伝道教会の訓育教程を二日に互って見学している(284)。一九一二年(明治四五年)四月一九日、吉野はヴェルツブルクで市副牧師ピュルツなる人物に出会い、「此男中々Orthodoxナリ」と警戒している(289)。

吉野作造はこのようにドイツのプロテスタント教会を訪問して、それらが（後述のように否定的に評価している）カトリック教会と余り変わらないと感じ、大いに落胆した。ヴェルツブルクのシユテファン教会で、前述の正統派牧師ピュルツの礼拝を見たときの感想である。「説教後祭壇ノ前ニテ声ニ節ヲ付ケテ祈禱ヲ捧グル所ヲテ旧教的ナリ 要スルニ独乙ノ Protestantismus ハ其教理ニ於テ Katholizismus ト異ル所ヲ見ズ Rome 法王ノ教権ヲ認メザルト其儀式ノ左マデ複雑ナラザルトノ外何処ニ両者ノ差異ヲ認ムベキヤ 予ハ深ク Luther ノ何ヲ説キシカラ知ラズ 去レド Luther 以後独乙ノ新教ハ旧教ニ跡戻リセシニ非ズヤノ感アリ 新教旧教ノ争ハ必竟名目ニ依リテ障壁ヲ立ツルモノナルヤモ知ル可カラズ」(292)。また吉野は、友人ハーネの故郷であるヴェストファーレンのシユヴェルムで、ドイツ・プロテスタントイズムの領邦教会制度に触れた。人口二万足らずのシユヴェルムに立派な教会堂があることを不思議に思った吉野は、プロイセン王国では「所得税の四五パーセント」の教会税が徴収されているために、壮大な教会堂が建立され、聖職者に高給が支給されていることを知ったのである(157)。それどころかヴァインでは、吉野自身が地元のカルヴァン派教会から教会税を払うよう督促状を受け取り、異議を申し立てることになった(228)。

ドイツのプロテスタント領邦教会に批判的な吉野作造は、ドイツにあるアングロ＝サクソン系のプロテスタント自由教会に好んで足を運んだ。ハイデルベルク時代の吉野は、一九一〇年(明治四三年)一〇月一六日にプフォルツハイムで友人シユタールの案内によりメソヂスト教会を訪ねている。吉野は質素な教会堂に「氣持ヨシ」と共感を示したが、ヘンリー・ドラムモンドの著作を連想する長い説教には、海老名弾正の説教の方が情熱において上だと感想を記している(135)。この経験が影響したのか、吉野は一九一〇年(明治四三年)一〇月二三日にハイデルベルクで再びシユタールとメソヂスト教会に赴いている(137)。吉野は一九一一年(明治四四年)二月五日ヴェルツブルクでもメソヂスト教会を訪れ、アメリカの資金援助に頼る非領邦教会の運営の困難さを実感した(179)。ヴェルツブルクでは一九一一年(明治四四年)三月二六日、更にメノナイト教会も訪問している(189)。吉野はロンドンに移ると、一九一三年(大正二年)四月二七日にシティー・テンプルでキャンベル(牧師?)の説教を聞き、好感を懐い

ている(392)。ただアングロ・サクソン系キリスト教会であれば、吉野には全て好ましく見えるというわけではなかった。一九一三年(大正二年)四月二〇日、ロンドンのセント・ポール寺院を見学したときの感想である。「中モ頗ル結構ナリ 但シ礼拝ハ聞き及ビシ通り長クシテ儀式一点張りナルコト旧教以上ナリ 説教ハ三十分斗リデ済ミタルモ説教マデガ一時半モカ、レリ 之レデハ心アル信徒ノ間ニ不平ノ声アルモ尤モナリ」(390)。吉野はカトリック批判の論法を、イギリス国教会にも当てはめていたのである。

ドイツ留学は吉野作造に、カトリック教会やその関連施設を間近で観察する機会も与えた。一九一〇年(明治四三年)一月にヴェルツブルクを訪れた吉野は、当地の「三四ノ旧教寺院」や、カトリック系の「ユリウス病院」とバイエルン王立師範学校を訪れている(141-142)。同年二月一日にはシュパイエルで、大聖堂を見て「壮麗目ヲ驚カス者アリ」と述べている(155)。吉野はまた、ケルンの大聖堂(156)、マインツの大聖堂(162)、ヴェルツブルクのマリーエンベルク要塞礼拝堂(207)、ローテンブルクのヤーコプ教会(210)、ミュンヘンの聖母教会(213)、ザルツブルクの大聖堂(215)、ヴィーンのシュテファン大聖堂(216・227)、ブダペストのブダ王宮教会と聖イシュトヴァーン教会(219)、メルクの修道院(231)、シュトラスブルクの大聖堂(294)などを訪れている。更に吉野は、フランス語圏でパリのマドレーヌ寺院(322)、ノートル・ダム大聖堂(349・358)、サクレ・クール寺院(350)、ランスの大聖堂(364)、アントウエルペンの大聖堂(380)も訪れている。

吉野作造は女中グレタの故郷であるヴェルツブルク郊外の村リーデンハイムを何度も訪れ、カトリック教徒の生活を観察した。吉野は一九一〇／一九一一年(明治四三／四四年)の年末年始にここに初めて滞在し、年越の祝祭を体験したが、それ以降も繰り返し滞在し、一九一一年(明治四四年)四月二日に聖体行列を見物したり(191)、復活祭前日(四月一五日)の行列を見物したり(194)、四月二四日に堅信礼を受ける少年少女の団に遭遇したりしている(196-197)。吉野は、説教がなく礼拝だけのカトリックの儀式を目撃して、まるで仏寺へ行ったかのようだ、

(聖職者が)芝居で見るとような服を着ているなどと、すっかり呆れている(166)。更に「滞徳日記」には、カトリック農村の生活風景に懐く興味と違和感とが表現されている。「驚いたのは年中缺かさず毎日禮拜があることである。嚴寒の時候でも毎朝八時半から禮拜がある。日曜日の朝には特に説教がある。日曜には此外午後には子供のは一時半位で終るけれども、處によりては三時間も續くさうである。其間禮拜と云つても祈禱書の順序に従つて讚美歌をうたひ、祈禱文を讀む丈けである。局外の見物人には頗る意屈である。一年三百六十五日も缺かさざるのに、全村殆んど擧つて出席するのに驚いた。子供でも、苟くも學齡以上は必ず出席せねばならぬ、考へて見れば可愛相である。牧師の讀經から衣物まで、日本の佛僧其儘だ。〔。〕禮拜の際は獨乙語でモンストランツ (die monstranz [sic]) といふ者に向つて祈る。一尺ばかりの金で作つたピカ／＼する者で、神の姿に像つた者だと云ふ。一名『聖の聖なるもの』 (Aller-Heiligste) とも云ふ。禮拜の終りに、牧師が恭しく白い布で手を包んで之を捧げて信者の方に向ふと、信者は難有さ「有難さ。」身に餘つて十字を切る。」(「滞徳日記」283)

吉野作造はプロテスタントらしく、カトリック教会の權威主義、偶像崇拜、儀式重視、反プロテスタンティズムを酷評した。「予の考では、舊教は專制一點張りで行く。牧師の言は信者に取つて王侯の言である。子依の時からアレで押し付けて行くのだから能く無理も通るのであらう。牧師は何れも頗る激烈に押し寄せて来る。舊教で牧師に妻帯を禁じたのは中々意味があると思ふ。妻帯すると人間は軟かに成る。舊教が若し牧師の妻帯を許したら、牧師は常識的になりて今までのやうに非文明の壓制は能くし得まい。」(「滞徳日記」283)「又或る時十九になる大學生の舊教徒と話した時、ウツカリあなたの御國の偉人ルーテルがとやつたら、『彼は決して偉人に非ず』(Er ist kein Grosser)と一本やられて閉口した。舊教では歴史を枉げてルーテルを凡人にして仕舞つて居る。」(「滞徳日記」286)「兎に角舊教は本來今の時勢と逆行するものだから、構はずに置けば衰頽に傾くべき筈のものである。而して法王始め僧侶等は、極力現勢を維持せんとあらゆる手段を盡すだけ、それだけ案外愚民の間に基礎は堅い。」(「滞徳日記」285)吉野のドイツ滞在中に當る一九一〇年(明治四三年)九月一日、教皇ピウス一〇世は「近代主義者宣誓」(Modernisteneid)の制度を定めた。

これはカトリック教会の教義や習慣を信奉し、近代的観点からこれを批判することをしないと聖職者志願者らに宣誓させるという制度で、ピウス九世の路線を継ぐものであった。吉野は翌年一月一五日にラテン語宣誓文の独訳に接して激怒している。「旧教ノ伝説ヲ Götliche Ursprung [sic] トシテ其儘之ヲ信ジ此伝説ニ反スルモノヲ一切斥ケ進化論ヲ否定シ聖書ノ科学的研究ヲ否定スルコトヲ誓ハシムルモノニシテ実ニ暴戾ヲ極メタルモノナリ スンナコトガ真面目ニ受ケ取ラル、トハ旧教ノ惰性モ亦大ナリト云ハネバナラヌ」(173)。

吉野作造は、カトリック内自由教会とも言うべき古カトリック教会に強い興味を示している。古カトリック教会とは、ピウス九世の教皇全権主義に反撥し、旧来のカトリック教会の在り方に留まると称して教皇庁から分離した宗派である。古カトリック教会はドイツを中心に周辺国に展開したが、ローマに抵抗するドイツ的なカトリック教会として、第三帝国体制のもとでは優遇されることになる。吉野が最初に訪れた古カトリック教会は、プロテスタント教会と共同使用になっていたハイデルベルク旧市街の聖霊教会であったが、吉野はこれをカトリック教会とプロテスタント教会との共同使用教会であると誤解していた²。一九二二年(明治四五年)三月三日、吉野はベルリン・クロスター通の古カトリック教会の日曜日朝のミサを訪れた。吉野の感想は淡々としたものだった。「十時四十五分ノ始リナルガ五分斗リ後レシガ丁度説教ノ最中ナリ 相応ニ大ナルガ会衆ハ僅ニ三十名斗リ 男女相半バシ多クハ老人ナリ Altar 毛至ツテ簡單ナリ Messe 毛本式ノ Katholische Kirche ヨリハ簡單ナレドモ大抵ハ同一ナリ」(275)。三月一三日には、吉野はベルリンのシェーファー通に古カトリック教会の司祭トラウビンガーを訪ね、同教会について丁寧な説明を受けた(276)。

キリスト教と並んで吉野作造はユダヤ教にも関心を懷き、会堂や施設を再三訪れている。吉野はすでに一九一一年(明治四四年)九月二四日にヴィーンでユダヤ博物館の見学を試み(但し休館中・242)、一九二二年(明治四四年)九月二七日にプラハでユダヤ人墓地を見学し珍しがるなど(243)、ユダヤ人に興味を示していた。あるいはイエリネック夫妻との出会いが、一つの契機だったのかもしれない。一九二二年(明治四五年)三月一日、吉野は在留邦人の

仲間とベルリン・オラニエンブルク通の大シナゴークを訪れ、金曜日の晩禱を見学した。「二三千人モ入りサウナ会堂ナルガ来会者ハ数百人ニ足ラズ 男モ帽子ヲ取ラズ其儘礼拝ニ列ストハ兼々聴キ居リシガ婦人ハ悉ク楼上ニ会シ即チ男女其席ヲ同ウセザルハ聊カ妙ニ考ラル 正面Alterノ前ニテRabbiner頻リニ祈禱文ヲ読ミ時ニ美妙ナル音楽ヲ挿ム 僧ノ祈禱音声ウルワシク調諧アリテ宛トシテOpfergesangヲ聴クガ如ク人ヲシテ恍惚タラシム」(274)。(こ)で吉野は、ユダヤ教の祈禱を、「ウルワシク」、「美妙ナル」、「恍惚タラシム」などの好意的な評価を交えて紹介している。カトリック教会の場合、説教が少なく祈禱中心の礼拝は仏教的だと否定の対象であり、同じような疑念はプロテスタント正統派にも向けられていたのだが、吉野は何故か同じ基準でユダヤ教正統派を批判しようとはしなかった。ただそれでも吉野は、男性が脱帽せず男女同席でないこの大シナゴークの儀式に、一抹の違和感をも懐いていた。そこで吉野は改革派ユダヤ教徒の世界にも足を伸ばしていった。一九一二年(明治四五年)三月一〇日(日曜日)、吉野は「自由宗教共同体」(Freireligiöse Gemeinde)の集会を訪れた。吉野は当初プロテスタントの集会だと誤解していたようだが、ユダヤ教正統派の批判などが盛んに為されるのを聞いて、改革派ユダヤ教徒が参加者に多いのではと思うようになったという(276)。その一週間後の一九一二年(明治四五年)三月一七日、吉野は改革派ユダヤ教の「解放記念祭」(一八一二年三月一二日のプロイセン王国におけるユダヤ人解放を記念する祭典)を見学する。この賑やかな集会で、吉野は男性の脱帽や男女同席など、彼から見て違和感のないユダヤ教の現代的な集会があることを知る(277)。翌一八日、吉野はシオニズムの演説会に出向き、更に二八日にはユダヤ教学校を訪ね(但し辿り着けず断念)、二九日にはユダヤ教説教師レヴィン博士を訪ねてユダヤ教について質問した上著書を寄贈され、四月一日には再度ユダヤ人学校を訪ねるなど、吉野はユダヤ教の世界に深く分け入って行った(277・281)。吉野は一九一二年(明治四五年)四月三〇日にヴェルツブルクでも、偶々遭遇した某牧師の講話「シオニズムとキリスト教」を聞いて「中々面白シ 殊ニJudenノ Christentumニ対スル態度ハ殊ニ面白シ」との感想を残し(293)、同年五月三日にシュトラスブルクでもシナゴークを見学している(294)。

②吉野作造はドイツ及びヨーロッパの君主制に関心を示した。吉野は理論的にも心情的にも、君主制を強く支持する立場にあった。吉野は一九一〇年(明治四三年)一月三日にヴェルツブルクで同胞と明治天皇の天長節を祝い(143)、一九一二年(明治四五年)七月にはその御不例、崩御の報に肩を落とした(315-318・342)。一九一〇年(明治四三年)八月の「日韓合邦」に際しては、「日本皇帝」が「特ニ勅諭ヲ発シ韓人ニ特赦ヲ命ジ減税ヲ約セリ」との報を日記に特記している(119)。更に吉野は、乃木希典夫妻の殉死に非常に感激していた。「此日新聞ニテ先帝陛下葬送ノ御当日乃木大将夫妻自刃以テ故帝ニ殉ジタリトノ報ニ接ス 其挙動ニハ賛成スベカラズト雖モ大将ノ忠節ニハ深く感動セザルヲ得ズ 国民ニモ深大ノ印象ヲ与ヘタルコトト察セラル 大将ノ一死ハ必ズヤ国民ノ心裡ニ誠忠ノ大節ヲ復活セシムルモノアルベキヲ疑ハズ 西洋ノ新聞デモ解シ難キコトデハアルガ何セ偉イコトナリト嗟嘆スルニ一致セルモノ、如シ 乃木大将ノ為ニハ桃山ノ麓ニテモ墓ヲ作ツテヤリ度キモノナリ」(331)。この直前、ヴィーン滞在中の吉野作造は、来訪した乃木希典一行を他の在留邦人と共に歓迎し、一九一一年(明治四四年)七月一六日の歓迎会では、秋月左都夫ヴィーン駐劄大使の発声により参会者一同で乃木大将万歳を三唱しており、とりわけこの老将に愛着があったものと思われる(223)。吉野は更に、海老名弾正が『新人』第一三卷第一〇号に発表した乃木殉死擁護論³にも共感している(342)。ロンドン滞在中の一九一三年(大正二年)五月二一日には、吉野は大正天皇の病状にも意を払っている(397)。このように日本の君主制に強い関心を懐く吉野は、ヨーロッパとりわけドイツの君主制にその比較対象を求めたのである。

ドイツ留学中の吉野作造は、折に触れてドイツの君主制について感想を述べていた。バーデン大公国のハイデルベルクに滞在していた一九一〇年(明治四三年)一月二四日、吉野は大学合唱団も出演するハイデルベルク・パツハ協会二五周年演奏会に来臨した領邦君主(ツェーリッゲン家・プロテスタント)、バーデン大公フリードリヒ二世及び同大公妃ヒルダの一行に遭遇した。「Großherzog ナドモ至テ簡單ナモノデ群集ヲ押し帰分ケテルニ群集帽ヲ御辞儀スレバ取リテ之ニ中ニハ一々対ヒ握手ヲ以テ答フルモアリ 護衛ノ侍者モ至テ少数ニテ頗ル愉快ニ感ジタリ 日本ニテハ此通

ニハ行ハレ難キモ今少シ之ヲ模シタキモノナリト思フ」(137)。これに先立つ一九一〇年(明治四十三年)九月二〇日、バーデン大公夫妻の銀婚式の日雨が降ったことを残念がる記述も見受けられる(127)。吉野が肯定的に評価したバーデン大公家は、ドイツでも民衆に近かったとされることが多い。第一次世界戦争最末期の一九一八年(大正七年)一〇月に、ドイツ帝国の議会主義的国制改革と講和交渉とを担って登場した最後の帝国宰相マクシミリアン・フォン・バーデン大公公子・辺境伯は、バーデン大公位継承者(フリードリヒ三世の甥)であったし、一箇月後のドイツ革命でもバーデン大公国では君主制崩壊が他地域より遅れたのだった。これとは逆に、吉野が否定的に評価したのがプロイセン王家(ホーエンツォレルン家・プロテスタント)である。一九一一年(明治四十四年)十一月一日、ドイツ皇太子・プロイセン王太子ヴィルヘルムが帝国議会本会議に臨席し、帝国宰相テオバルト・フォン・ベートマン・ホルヴェークのモロッコ政策を弱腰と批判するゲオルク・フォン・ヘルトリング男爵(中央党)、ハイデブラント・ウント・デル・ラーザ(ドイツ保守党)の演説を応援する仕草をしたという新聞報道に言及して、吉野は父親のドイツ皇帝・プロイセン王ヴィルヘルム二世と同様に「御セツカイナ人」だと嘆息している。これはヴィルヘルム二世の「親政」(Persönliches Regiment)、とりわけ「デイリー・テレグラフ事件」を念頭に置いての発言だと思われる(254)。

一九一三年(大正二年)二月六日に皇帝の日常生活の場であるポツダムの新宮殿(Neues Palais)を見学した際にも、吉野は「美ハ美ナリト雖モ裝飾俗悪ヲ極メ」と酷評し、それをヴィルヘルム二世の性格の表れとして、フリードリヒ二世のサン・スーシ宮殿と対比している(367)。ただ吉野はプロイセン王室に常に否定的だったわけではない。吉野はベルリンの「家庭と職業における婦人」博覧会に赴いた際、ドイツ皇后・プロイセン王妃アウグステ・ヴィクトリアの行啓に遭遇した。参観を制限された一般客には当初苦情を言うものも出たが、皇后・王妃本人が姿を現すと忽ち「国歌」斉唱となった。これを見て吉野は、プロイセン王家への民衆の恭順に呆れるのではなく、寧ろ「亦懐シ」と好意的に評している(279)。バーデンであれプロイセンであれ、王朝と民衆との交歓には好意的というのが吉野の基本姿勢であったようである。また一九一二年(明治四十五年)一月二十七日、ヴィルヘルム二世の皇帝誕生日に、吉野は

「皇帝此朝盛装シテ Unter den Linden ヲ通ル」との報を聞き、友人の小山田に誘われて駆けつけるも、二時間待つて何事もなく空しく引き揚げるという失態を演じている(269)。なお吉野は、ドイツではしばしば君主の行幸啓に遭遇し、一九一二年(明治四五年)四月一日には、アイゼナハ郊外のヴァルトブルク城を見学中にザクセン・ヴァイマル・アイゼナハ大公ヴィルヘルム・エルンストが訪れて、肝心のルターの部屋を十分に見られなかったが、特に苦情は述べていない(287)。一九一二年(明治四五年)五月一三日にはシュトラスブルクで他ならぬ皇帝ヴィルヘルム二世の来訪に遭遇し、市中の歓迎振りに興味を示している(296―297)。

吉野作造の君主制への興味はドイツ国内に限定されなかった。ハイデルベルク時代の吉野は一九一〇年(明治四三年)一〇月五日から翌年年頭にかけてポルトガル王国での革命騒動に関心を示し、価値的評価は加えずに国王の動静と共和国の樹立に注目している(131・132・167)。また一九一二年(明治四五年)七月二〇日、仏領ローヌ(独名ロートリンゲン)地方の都市ナンシーで、明治天皇御不例の報に沈痛な思いでいた吉野は、君が帰国して天皇に取って代わつたらいいじゃないかと、現地人から冗談を言われて驚いている。吉野は王党派の強いとされるナンシーですら、君主について軽々と語るフランスの風土に驚かされたのだった(315)。一九一二年(大正元年)八月二五日にヴェルサイユ宮殿を訪れた吉野は、その壮麗さに驚嘆しつつもこう付け加えている。「斯ナ贅沢ヲシテ民ヲ塗炭ニ苦メタンダカラ革命ノ起レルモ無理ナラズト想ハル」(325)。これ以外にも、領民二十五万のモンテネグロ「侯」(公)ニコラ一世が「王」になることを奇妙だとする感想(116)、「多数の学者」が編纂したモナコ侯国(公国)憲法案案への着目(169)、ギリシア王ゲオルギオス一世の暗殺への言及(383)が見られ、パリで「アルト・ハイデルベルク」を観劇した際には、身分違いの恋に感慨を深めている(347)。

③吉野作造はドイツの社会主義運動に強い興味を示している。前述のように吉野は留学前からドイツ社会民主党に注目しており、のちには日本で社会民衆党の結成に参画し、また彼の薫陶を受けた東大「新人会」からは日本共産党の幹部も巣立つなど、日本における社会主義運動の発展に重要な役割を果たした。そうした吉野が、この分野でもドイツ留

学から刺戟を受けていないはずがなかった。

キリスト教信仰の影響か、吉野作造は当初から弱者保護政策に興味があったようで、留学開始後程なくしてハイデルベルク・ブレッケン通の貧民院（カイザーより集会への参加を誘われたものの病気のため欠席）（130）、そしてエルヴェルスハイムの盲人院（153）に言及している。更に吉野は、ヴェルツブルクで大土地所有制のもとでの農業労働者、奉公人の労働条件について調べ（204―205）、ヴィーンでは礦山用の救命装置の製造会社にも足を伸ばしている（238）。ドレスデンの「国際衛生博覧会」では、吉野は労働者保険や統計に関心を示し（245）、ベルリンでは「労働者福祉常設展示場」を見学している（251）。エッセンでは、吉野はクルップの労働者居住地を見学している（371）。

吉野作造はドイツ人労働者を間近に見て、彼らの知的水準に驚かされることになった。前述のように吉野は「ナツプ婆」の女中グレッタの実家をリーデンハイムに訪れ、かなり親密に交流しているが、大学教師が下宿先の奉公人と家族ぐるみの付き合いをしたというのは注目に値することで、相手に人間としての敬意と共感を懷いた結果だろう。吉野はハイデルベルク時代、一九一〇年一〇月一五日にプフォルツハイムで数千人規模の金銀細工工場を見学し、日本と違って整然としている様子に感心した（134―135）。一九二一年（明治四四年）九月一七日にヴィーンで、吉野は食料品価格高騰に抗議するデモに遭遇しているが、彼は警察の寛容さと民衆の秩序立った振舞うに感心した（239―240）。実際にはこの示威運動は、吉野の見えていないところで暴徒化していたのであり、彼も翌日「死者一名傷者89名」という情報を新聞から得ることになる（240）。ところが吉野の労働者に対する好印象は、衝突の事実を知っても訂正されず、寧ろ九月二一日に死者の葬儀に参加し、その「静粛」さにまた感心する有様であった（241・242）。一九二二年（明治四五年）三月二六日にベルリンで「社会民主党ノ政談演説会」を訪れたときも、吉野は労働者たちの議論に感激した。「労働者ガ Diskussionノ際喋舌ルモノ五六名中々彼等ノ間ニモ政治思想ノ普及シテ居ルニハ関心セリ」而カモ熱セズ狂セズ終始中正ノ態度ヲ持シテ紊レザルニハ感服ノ外ナカリキ（280）。ドイツ

人労働者に対する高い評価は、のちに吉野が日本で社会主義政党結成の支援に乗り出す際の心理的前提になったものと推測される。

吉野作造は一九一二年一月二日にドイツ帝国議会議員選挙が行われ、決選投票の結果反体制政党だったドイツ社会民主党が第一党になるという歴史的瞬間に立会った(267・268・269)。吉野は増大した社会民主党、進歩人民党、国民自由党が連携して、ペートマン・ホルヴェーク政権を支える「黒青ブロック」(ドイツ保守党・帝国党・中央党の連合政権)を倒すことを期待した(268)。社会民主党が第一党になると、帝国議会議長が社会民主党から選出される可能性が増大したが、帝国議会議長はベルリンのプロイセン王宮「白堊間」で開催される開会式で、議員を代表して皇帝の前で「皇帝・国王陛下万歳」の発声をする役柄だったため、君主制を批判していつも開会式に参加しない社会民主党員が就任するのは、非礼を働く虞があつて不適当ではないかという声が上がった。結局二月上旬、帝国議会議長に進歩人民党からヨハンネス・ケンプフが選出され、社会民主党からはフリーツ・シャイデマンが副議長に選出されることで落ち着いていたが、この事件の顛末を吉野は三月一二日に東京の小野塚に報告している(276)⁷。このころ吉野は丁度ベルリンに滞在しており、社会民主党を観察する好機となったのである(266)。

④吉野作造は、ドイツの婦人運動に関心を示している。本郷教会は安井哲子(のち東京女子大学第二代学長)など女性信徒を集め、『新女界』を発刊するなど婦人教育に力を入れており、吉野自身ものちには婦人参政権の主張者になっている。この問題領域においても、吉野はドイツから大いに刺戟を受けていた。

吉野作造は、早速ハイデルベルクで婦人運動に遭遇した。皮切りは一九一〇年(明治四十三年)一〇月六日、ハイデルベルク市公会堂での婦人同盟演説会だったが、その内容は「眠クテ」よく分らなかつた(131)。しかしその三日後、華々しくハイデルベルク城址の野外照明が行われ、ドイツ婦人団体連合のハイデルベルク大会が開かれた。吉野はもはや集会には行かなかつた模様だが、これを契機に現地人のフリッツ・シュヴァイツァー⁸から、イエリネック夫人のカミラについて悪評を聞いた。「Frau Jellinekノ批評ナドモ出テ同夫人ハ Kellnerin 廃止運動ニ熱心ダガ。之ヲ廃シタト

テ Kellern 其自身ハ又姿ヲ代ヘテ出没スルシ男ノ学生ナドモ之ニハマルカラ駄目ダ 夫ヨリモ各夫人連ハモツト根本の青年ノ教育開導ニ心ヲ注イダガ宜イ Jellinek 夫人ナドハ社会的ノ問題ニハ熱心ダガ其代リ家事ヲ放擲スルノデ内ハ相當ニ汚イサウダシ子供達モ能クナイサウダナドノ話モ出ル」(132—133)。四日後に吉野はイエリネック夫婦がユダヤ人であることを聞きつけ、市中で余り話題にならないのはそのためかと推測した。「夫人モ同じク猶太人デ頗ル出シヤバリノ嫌ナ女ナサウデアル」(134)。これらイエリネック夫人の否定的評価は、全て伝聞の形態をとっており、吉野自身が直接本人と会って得た感想ではない。けれども「頗ル出シヤバリノ嫌ナ女ナサウデアル」という表現には、すでに吉野自身の感情も籠りつつあった様子が読み取れる。ところが驚くべきことに、吉野はこのイエリネック夫人について、『新人』には全く異なる紹介をしている。「同先生の夫人は有名な女権運動家である。学識のある熱誠な方なさうだ。併し獨乙の婦人は、まだ一般に云へば日本婦人の様にジミな方で、社会的に活動する者に対しては余り快く思つて居ない。エリネック夫人に対しても『飛び廻つて歩くよりも家庭の締りをしたら宜かしさうなもの』と皮肉な悪口する人もある。」(滯徳日記279—280)ここで吉野は、イエリネック夫人について「学識のある熱誠な方なさうだ」という良い噂をまず紹介している(この表現については、日記に相応する事実が見当たらない)。吉野はイエリネック夫人批判にも言及しているが、ここでは寧ろフェミニズムの見地からドイツ社会の無理解が批判されている。蓋し吉野は、社会活動に邁進する女性を「頗ル出シヤバリノ嫌ナ女」と問題視する家父長主義者の顔と、洋行先から母国の読書人たちに「有名な女権運動家」を「学識のある熱誠な方」と評価してみせる進歩派言論人の顔という、二つの顔を使い分けていたと見るべきだろう。

婦人運動に対する吉野作造の微妙な態度は、これ以外にも多数垣間見ることができる。吉野は一九一三年(大正二年)四月六日に「家庭内職業婦人同盟」を参観した際、弁士の激昂ぶりを白眼視している(386)。またロンドン滞在中、婦人参政権論者の乱暴狼藉が激しいため、ウインザー城などの宮殿見学ができなくなっている状況に、吉野は「甚ダ遺憾ナリ」と不快感を表明している(388—389・393)。ドイツの良妻賢母志向を紹介する以下の文章も

見逃せない。「近頃女の大学生が頗る殖えた。十年前には全國通じて百人内外であつたが、現今は數千人に達し、ハイデルベルグの大學にだけでも百五六十人は居る。」僕の宿の主婦は曾て、五六年前は女大学生といふものは殆んど目に付かなかつたが、近頃は變なイヤな風をした婦人書生が頗る多くなつたと、皮肉を云つた事がある。教育のない老人の言だけれども、要するに此現象にすら同情がない。中には、金持の娘で容色の悪い娘さん達が女學生になるのだと皮肉を云ふ者もある。成程容色の美しい人は少いやうだ。縁の遠い年だけた老嬢が、教師の資格を得るために大學に来るのだと云ふ人もある。之も中ばは本當であるらしい。要するに獨乙では、婦人の社會に出て活動したり、高尚な教育を男子と共に受くると云ふやうなことを以て、喜ぶべきこと、は認めて居ない。」続いて吉野は、素性の怪しいロシヤ人女性が學生身分を取得し、ハイデルベルクに「醜業」を営んでいるとも述べている(「獨逸見聞録1」18—19)更に吉野は、ドイツの婦人たちの深夜外出にも苦言を呈している。吉野は一九一一年(明治四四年)二月四日、ヴェルツブルクでかねがね楽しみにしていた仮面舞踏会に参加したが、夜十時より開始して朝の四時まで会が続いたのには辟易した。「中ニハ壯年老年ノ婦人モ来リ居レルガ見ツトヨカラズ 兎ニ角之ハ慥ニ獨乙ノ Schattenseite ナリ 日本ナラ直ニ警察ノ御差止ヲ食フベキ奴ナリ」(178)。

吉野作造は欧米滞在中、常に女性に関わる諸問題に注意を払い続け、様々な感想を残している。吉野は一九一一年(明治四四年)一月四日、リーデンハイムの小学校で男女共学、自由な教授法、子弟の親密な関係、見学者に臆しない子供たちに感服し、女生徒の勤勉さについて報告している(168・「獨逸見聞録2」21)。また吉野は、ドイツにおける「人工的避妊の弊」を批判し、ドイツも遠からずフランスのような人口減少に苦しむだろうと予想している(「獨逸見聞録2」27—28)。一九一二年(明治四四年)九月一七日にヴィーンのデモやその被害者の埋葬を観察した際には、吉野は女性の参加者がデモで一割以上、埋葬では半分もいることに驚いている(240)。吉野は一九一二年(明治四五年)一月二一日にベルリンでも、今度はある選挙集会で、女性の参加が「甚々多」と感じた(266)。ベルリンでは更に、吉野は婦人選挙権に関する演説会を傍聴し、聴衆の八割が婦人であることに驚いている(271—

272)、また「家庭と職業における婦人」博覧会を参観している(278)。一九二一年(明治四四年)九月二八日、プラハからドレスデンに向かう車中では、吉野は乗り合わせた「年増ノ婦人」が、彼の持参した新聞を無断で読んだばかりか、これを「グヂヤ々々々」にして尻の下に敷くという驚愕の事態に遭遇し、憤激することになった。「婦人ナラザリセバ大ニ面責シテ其無礼ヲ叱責シテヤリタカリシ」(244)。一九二二年(大正元年)九月二五日にジュネーヴの平和会議を傍聴した際には、婦人選挙権者が乱入して騒動を起こし、退場させられる様を見て、吉野は「一寸面白シ」と感想を漏らしている(334)。

⑤吉野作造は三年余りのドイツあるいは欧米滞在のなかで、日本と西洋との違い、日本人と西洋人との違いにいつも思いを馳せていた。

吉野作造は欧米社会を、細部まで隈なく観察している。吉野はハイデルベルクでドイツ学生組合の文化に興味を示し、剣術稽古、松明行列、愛唱歌「ガウデアームス・イギトウル」(学生組合で愛唱されたラテン語学生歌)の斉唱などを見物したほか(136・150・152・176)、アイゼナハではブルシェンシャフト記念碑を見学している(288)。更にヴェルツブルクの陪審裁判所(198・203)、ハイデルベルクの眼科病院(123)、ヴィーンの大法院と市立精神病院(220・232)、ネッカーエルツのビール工場(178)、リーデンハイムの民家での屠殺及びソーセージ作成作業(193)、ヴィーンの顕微鏡の会社(238)、ベルリンのヴェルトハイム百貨店(258)、ベルリンでの国際学生協会の *Chinesischer Abend* (但し中止・274)、パリのルーヴル百貨店(320)、リュッツェン付近のニーチェ生誕地(実現せず・283)、フランクフルトのゲーテ博物館・ショーペンハウエル博物館及び墓所(但し両博物館は閉館中で断念)(139―140)、ヴァイマルのゲーテ・シラー霊廟(283)、ライプツィヒ郊外の諸国民戦争記念碑(当時建設中)(282)、ヴェルツブルクの修道院の手芸展覧会(292)、シュトラスブルクの「軍艦博覧会」とエルザス工芸館(289・306)、飛行機(但し失敗・297)、パリの廃兵院(ナポレオン霊廟)(321・349)、ゴブラン織工場(324・351)、パンテオン(326・358)、ゼタン(雨天のため町のみで古

戦場に行かず・364)、ワートルロー(378)など、見物(を企画)したものは多岐に及んでいる。なおジュネーヴの万国平和協定会議では、かつて著作を訳したかのフリートに面会を申し出て、一九二二年(大正元年)九月二十七日に実現している(335)。

なかでも吉野作造は欧米各国の議会に強い関心を示し、その審議の傍聴に努めている。皮切りはブダペストのハンガリー王国議会で、吉野は首相クエン・ヘーデルヴァーリ・カーロイ伯爵の演説を傍聴している(219)。次いで吉野はヴィーンの帝国議会も訪れたが、混雑のため断念し、代わりに議事堂博物館を訪れたり、普通選挙施行後間もないエステルライヒの選挙勢力地図などを購入したりしている(223、225・232)。一九二二年(明治四五年)三月七日ベルリンでは、吉野は日本大使館員だった武者小路公三爵の伝で、ドイツ帝国議会の議事風景を外交官席から傍聴している(275)。シュトラスブルクでは、開設されたばかりのエルザス・ロートリンゲン領邦議会を傍聴している(296)。パリでは一九二二年(大正元年)八月二十五日、一〇月七日と二回もフランス代議院を見学し、一〇月八日に議席購入のため三度目の訪問をしたが、一〇月七日に試みた元老院の見学は認可が必要と言われ失敗し、一九二三年(大正二年)一月一三日の再挑戦も傍聴席に限りありとして拒否された(325・336・359)。更にヴェルサイユでは、フランス革命勃発時の「球戯場の誓い」(一七八九年)の舞台である「ボーム球戯場」で感慨に浸った(344)。ルクセンブルクの一院制議会では、ドイツ語、フランス語が飛び交う議事風景を目にした(364・365)。吉野はブリュッセルのベルギー王国議会(外見のみ?)も見学している(377)。一九二三年(大正二年)三月二十九日には、吉野はロンドンの貴族院・庶民院の議場を見学した(384)。同年四月二日には更に議事風景を見学し、「平々凡々ニテ別ニ面白カラザリシモ流石英國文ニ敵味方行儀正シキニハ感服セリ」との感想を残している(390)。ヨーロッパの議会政治を垣間見たことは、のちの吉野の政治評論に大いに刺戟になったことだろう。ちなみに一九二二年(大正元年)九月八日ジュネーヴでは、市立博物館の是非を問う住民投票を参観し、直接民主制の実地検分もした(329)。

吉野作造は政治集会や講演会にもしばしば足を運んでいる。シュバイエルでのクリーク教授の講演「現代における教会の使命」(148—149)、ベルリンでの帝國議會選舉演説会、ベルリンでの国民経済学者ルヨ・ブレンタノーの講演(277)、ベルリンでのドイツ・オストマルク協会(278)、ベルリンでの国民自由党首エルンスト・バッサーマン(?)の講演(但し別人と分かり中止・278)、ヴァイマルでの自由主義言論人パウ・ロールバッハの中国に関する講演(286)、シュトラスブルクでの「ハンザ同盟」(自由主義系政治団体)の演説会(296)、シュトラスブルク「自由宗教派」講演会での「Parisノ人 Prof. Dr. Borda ト云フ人」の米仏政教分離についての講演(297)などの記録が残されている。

吉野作造は西洋文明の偉大さに触れて大いに感激した。吉野が感激したのは、以下のようなものに対してであった——フランクフルクにおける中央駅の壮大さ、市街の奇麗さ、(上野動物園と比較した)動物園の宏大さと(上野精養軒と比較した)附属レストランの広さ(120—121)、エルバーフェルトの動物園の(上野動物園と比較した)充実ぶり(375)、飛行船ツェッペリン伯号(122・250)、ヴェルツブルクの市街、城塞、宮殿の見事さ(123・141)。近現代の日本人洋行者の常として、吉野はしばしば西洋に対して劣等感を覚えることになったのだった——(フランクフルト植物園を見て)「斯ンナモノヲ見ルト日本ノ植物園ナド到底外人ヲ案内シテ見セラルベキモノニ非ズ」(121)、(ツェッペリン飛行船について)「実ニ偉イモノナリ」(122)。(シュバイエルのプロテスタント教会を見て)「欧洲デハ寺ハ一ノ美術品デアル 日本ノ教会ハ到底御話ニナラヌ」(155)。(バッハ協会演奏会について)「Piano デモ Violin デモ Organ デモ 笛デモ本場ダケニ素敵ナモノナリ 到底日本ニテハ聞カレタモノニアラズ 全ク感服セリ」(137)。バルメンのモノレール(156)。吉野が感激したのは、西洋文明の物質的側面ばかりではない。ドイツ人の親切さに対する吉野の驚きは大きかった(183・「滞徳日記」383—385)。「独乙ノ人ハ実ニ親切ダ 日本人モ実ニ斯クアリ度キモノトツク々々感ジタリ」(135)。またドイツ人の節約ぶりへの感激も大きかった。「而シテ Onken 先生ノ講義ノ原稿ガ広告カ何カノ裏ノ白イ所ニ書イテアルニハ其餘約ナルニ一驚ヲ喫セザル

ヲ得ザリキ 独乙ノ強キ所ハ茲ニアリ 人ハ皆儉約ニシテ且互ニ儉約ヲ以テ誇トス 日本人ノヤウナ徒ラノ見エ坊ハ大ニ鑑ミル所アルヲ要スト思フ(146)。「独乙人ハ儉約ナレドモ金ニ就テハ中々合理的ノ考ヲ持ツテル哩ト感心ス 徒ニ惜ムニ非ズ 真ニ金ノ価ヲ知ツテ合理的ニ之ヲ使フナリ」(157)。もともと吉野は日本には聊か調子を変えてこゝう書き送っている。「彼等は決して儉約を蔽はない。日本では儉約を以て一種の恥づべき行爲であるかの如く考へ、人の前に之を蔽ふ風がある。コーヒ屋に往つて見ると、餘つた砂糖をポッケットに入れて持つて歸る者があると云ふ話は兼々聞いて居つた。之は立派な紳士奥様も平氣です。或る宿屋で朝飯を食つた時、僕と相對して立派な紳士も一所に食事をして居たが、其紳士は僕の面前で、憶する氣色もなく餘つたバタをつけ、紙に包んで懷に入れた。多分晝食にもするのであらうか。立派な内の令嬢や奥様が、客との對談の前で、靴下の穴繕ひをするのは當り前の事である。」(「獨逸見聞録2」22—23)。リーデンハイムでは、警察なしに秩序が保たれるこの人工六百人の村に、「日本ノ如キ此点ニ於テ未ダ遙ニ及バズ」と感心している(167)。ナンシーでは、元教師ヘルが非常な資産家であることに驚き、日本も勅撰議員や枢密顧問官など顯官への給付を減らして一般公務員の俸給を充実させるべきだと主張している(308—309)。

ただ吉野作造は西洋文明にいつも恐縮していたわけではない。メインツでは、訪ねたキリスト教宿泊所が「室モ便所モ寝具モ何モ彼モ汚クテ寝ラレサウニナシ」と酷評している(161)。ドレスデンでも、ニューヨークでも、吉野はホテルの粗末さに苦言を呈している(244・400)。またフランス滞在中の吉野は、西洋人は着飾るものの、入浴が少なく夏場は汗臭くて堪らないと述べている(313)。精神面でも、吉野はときとして西洋人に厳しい視線を向けた。前述の無礼な婦人の逸話はその一例だが、同様のものは数知れない。特に目を惹くのは、ハイデルベルクの下宿先の大家「ナツプ婆」の強慾さ、女中グレタへの非情さの批判である(125・126・127・133・172)。ドイツ人の節約ぶりを賞讃した吉野だったが、それは場合によっては彼らの吝嗇、強欲、収賄への非難にも転化した(125・246・325)。ヨーロッパ各地で遭遇した現地人の好色さにも、吉野はしばしば批判を向けている

(260・345・368・370)。「ハンザ同盟」での演説会では、帝国議會議員某が四十分も遅刻してきた上、長手下な演説をしたので途中退席している(296)。ナンシーでは、町が埃まみれで治安が悪いことに苦情を述べている(305)。European Gentlemen (フランス人、ドイツ人)は *selfish* で嫌だというイギリス人女性の苦情も紹介されている(396)。帰国時に吉野はニューヨークでアメリカ人移民官の対応に憤慨した。「眼ノ検査ナド至ツテ簡單ナリシモ横柄ニシテ乱暴ナルコト言語道断ナリ 移民官ノ調べモ本来中々八釜シキガ肩書ガアルタメ到ツテ簡單ニ済ム」(400)。吉野はまたドイツの軍人崇拜を指摘し、軍隊関係者の横暴に苦言を呈しているが(186・192)、逆にルクセンブルク大公国については「軍事上競争ナキ国ニテアリ乍ラ国民概シテ生氣アリ羨シク感ズ」として好意を表明した(364)。この軍国主義の問題は、吉野の日記では他に僅かな記述しかないが(385・386)、やがて第一次世界戦争期になると彼の政治評論で大きな役割を果たすことになる。ロンドンでは、「独乙人 Dr. von 某シト云フ男来ル 青年会大会ノ際日本ニ行キシコトモアリト云フ 独乙人ノクセトシテ英ヲソシリ御国自慢ヲナス 一寸癩ニサワル 独乙人ハ個人トシテ附キ合フニハ嫌ナ奴ナリ」(387)と記している。

吉野作造はドイツ語圏から出るに及んで、ドイツとそれ以外の国との比較、あるいは両国間の関係に思いを馳せるようになる。ハンガリーに赴いた吉野は、ブダペストで町の不潔さや人間の下劣さ、ドイツ語を理解しない下層民に不満を懐いた(220)。プラハを訪れた際にも、家主の主婦や「カフェ・ヨコハマ」の店員らチエック人がドイツ語を解さないのに、吉野は苛立ちを表明している(243―235)。ドイツ領になったシュトラスブルクでは、吉野は軍事施設の充実ぶりに目を見張った。「今猶仏国領ノ古ヲ懐フモノ20%以上ハアリト云フガ併シ40年間ニモ能クモ *germanisieren* シタモノナリ 其手際頗ル見事ナリト云ハザル可カラズ」(一九二二年(明治四五年)五月二日)(294)。「ドイツ化」に関心のある吉野は、傍聴した領邦議會で「グラーフエンシュターデン問題」の論議に遭遇している。この事件は、帝国指導部・プロイセン政府から鉄道用器械を受注してきたグラーフエンシュターデン機械製造会社が、反ドイツの挙動ありとして注文を取り消されたのを契機に、エルサス・ロートリンゲンの労働者数千人が

騒擾を起したという事件であった(296)。シュトラスブルク大学でアメリカ憲法に関する講義を聴いた吉野は、聴衆が僅か三人しかいない光景を見て、ドイツ人が外国に興味が薄いのが一因だと断定している(294)。ナンシーのプロテスタント教会で説教を聞いた吉野は、「仏語ハ独語ノ如ク勢ガナク聞イテ居テモ甚ダ活気ナシ」と述べている(304)。ナンシーで理髪店に入った吉野は、粗雑なドイツのとは違って日本並みの丁寧さであることに感心したが、高い料金に愕然とし、外国人ゆえの特別料金ではないかと疑っている(306)。ナンシーでは、フランスの郵便局の為替手続がドイツのより不便であることを「文明国ニモ似合ハズ」と批判している(313)。パリでは、ルーヴル百貨店がベルリンのヴェルトハイム百貨店より見劣りがすること、店員が釣銭を誤魔化そうとしたことを批判している(320)。吉野のフランス人への評価は、この他にも厳しいものがある(324)。更に吉野はフランスの官吏にも手厳しい。「要スルニ仏国ノ役人ハ共和国ノ癖ニ独乙ノ如ク親切ナラズ骨ヲ惜ムコト夥シ」(322)。逆にブローローニユの森に通じる「ブローローニユの森大通り」については公園のようで、ベルリンのウンター・デン・リンデンなど及びも付かないと持ち上げている(323)。

吉野作造は日本や日本人が西洋でどう見られているかを、大いに気に掛けていた。一九一一年(明治四四年)九月二九日、ドレスデン「国際衛生博覧会」を見学したときの感想である。「之ヨリ直ニ日本館ニ入ル 夫ヨリ独乙以外ノ各国ノヲ見シガ日本ハ他ノ諸国ニ比シテ毫モ遜色ナキモノ、如シ 但シ独乙ノ此企ニ対シ英仏諸国ハ始メヨリ本気ニナラザルニ日本ノミ尤モ本気ニナリシ風ニ見ユ」「野地馬ト一緒ニ諸方ヲウロツキ先ツ *Abessinisches Dorf* ニ入りテ土人ノ生活ヲ見 *Ost-Asien* ニ入りテ印度人ノ手品踊リニ次デ日本芸者ノ手踊ヲ見ル 総勢5人日英博覧会ノ残物ナラン幕アクト三味線ニ合セテ君ケ代ヲヤル 振ハザルコト夥シ 三十分斗リニ踊数番ヤルガ何レモ感心セズ 只色黒キ野蠻ノ印度人ノ後ニ出デ顔ハ左マデ美ナラザレドモ相応ニ化粧シテ人ノ目ヲ惹クニ足ルヲ以テ西洋人間ノ評判ハ大シタモノナリ 此一廊ノ中ニ日本人生活ノ一班トシテ印刷屋彫物師ナド居ル 見ツトモヨキモノニアラズ 之ヲ出テ次ニ *Maroko-Theater* ヲ見ル 面白クナシ」(245)。ベルリンの仕立屋で夏服を注文した時、吉野は日本人が代金を支払わずに帰

国することがあるからドイツ人客より危険だという苦情を聞いて慨嘆している(275)。ジュネーヴで万国議員会議を傍聴した際には、日本人議員団が明治天皇崩御を理由に欠席しているのに不満を表明している。「同会議其物ハ左程重キヲナスモノニハ非ルモ日本ヲ世界的地歩ヲ占メタル今日世界的問題ノ討議ニ参加スルノ好機会ヲ我カラ放棄スルノハ大喪ト云フ大事ノ場合トハ云ヒ返ス返スモ残念ナリト思フ 大喪トハ云ヒ乍ラ国運ノ發展ニ関スル問題ハ之ヲ等閑ニ附スベカラズト思フ 如何シテモ日本ハ未ダ世界ノ一國タルノ意識徹底シ居ラズト思フ」(331・332)。吉野はドイツ各地で日本製品が売られていることに「愉快を感じた」が、ドイツで出回っている日本の漆器が粗悪品ばかりであることには落胆したのだった(「獨逸見聞録2」28—29)。

四、愛国心と劣等感との狭間で——吉野作造にとってのドイツ留学

太平洋周りで帰国した吉野作造を、大正日本は朝野を挙げて歓迎した。「政治史研究の爲歐米留學中の帝大法科助教授法學士吉野作造氏は三日横濱入港の讚岐丸にて歸朝の筈我邦にて政治史專攻は氏が嚆矢にて九月より氏が擔任となり帝大法科にて政治史を開講する由」¹⁰

歡呼のなかを帰国した吉野作造だったが、ドイツで過ごした年月は愛国心と劣等感との狭間で翻弄された日々であった。日露戦後の日本人エリートとして、吉野は並々ならぬ自信を帯びて出発し、日本人としての誇りを胸に、欧米人に対しても卑屈になるまいと努めた。けれどもドイツの学界には食い込めず、ドイツ人と学問的に交流することもなく、吉野の留学は穂積陳重や梅謙次郎のそのような華々しいものとはならなかった。ドイツ留學生・吉野のドイツ学問との疎遠ぶりは看過することができない。現地人の無礼な態度に立腹したり、西洋文明の偉大さに圧倒されたりすることも、一度や二度ではなかった。

ただ吉野作造のドイツ留学は、不愉快な思いだけを残したわけではなく、そこで育まれたドイツ観も十分多面的であった。とりわけYMCAの仲間との交流や徹底した実地検分は、吉野にとって示唆に富むものだったと思われる。欧

米諸国を巡って、吉野がドイツ語圏だけに否定的な印象を懐いたということは、少なくとも帰国の段階ではなかったであろうと思われる。

第一次世界戦争勃発後の吉野作造の厳しいドイツ政治批判に、ドイツでの滞在経験は勿論重要な役割を果たしたのだが、ドイツでの多種多様な体験がそのまま吉野のドイツ政治論に生かされたわけではなかったことが、この論文から明らかになった。大枠で言えば、日英同盟、日独戦争、アメリカ合衆国の擡頭という新しい状況を肯定するために、吉野にはドイツ帝国を批判する必要が生じ、ドイツで積んだ知見はそこで動員できる範囲でのみ、選択的に活用されたに過ぎなかったと見るべきだろう。¹¹

注

¹ 「強て話を迫られたことは只一度ある。ウキーンナ□學□梵語教授シロエーデル先□宅に數名の信徒學生と連れ立つて招かれた□、日本の學生間の□仰状態を嫌應なしに述べさせら□たのであつた。馬鹿にまづいドイツ語であつたことは勿□だが。聞く方の態度は先生のも學生のも少しも僕を氣耻□しく思はしめざる程澁切なものであつた。」（吉野作造「教授學生の澁密なる接近をはかるには」、「帝國大學新聞」第五八号（大正十二年一月二十六日）、一頁、空字は脱落部分）。

² ハイデルベルクの聖霊教会は、一八七四年からプロテスタント教会と古カトリック教会との共同所有となっており、一九三六年にようやくプロテスタント（合同）教会の単独所有となった（*Heiliggeistkirche Heidelberg*, 3. Aufl., Regensburg 2000, S. 8）。

³ 海老名彈正「社説：乃木大將の死を論ず」、「新人」第一二三卷第一〇号、一—六頁。海老名は殉死を一般的には現代にそぐわないものとして否定しつつも、乃木のそれはそこに込められた純潔な精神ゆえに擁護した。更に海老名は、晩年の乃木が学習院長長として華族の師弟たちを教育していたことに言及し、彼らの愚鈍さを院長乃木の高邁さの対極に位置付け、特權身分への反感を露わにしている。

⁴ *Schulhess' Europäischer Geschichtskalender 1911*, München 1912, S. 213 f.

⁵ 一名死亡、三名重傷、八十名軽傷という情報もある（*Schulhess' Europäischer Geschichtskalender 1911*, München 1912, Bd. 1, S.

309)。

6 Schuthess' Europäischer Geschichtskalender 1912, München 1913, Bd. 1, S. 72 f.

7 小野塚喜平次はこの事件を紹介しているが（小野塚喜平次『現代歐洲之憲政』（博文堂、大正二年）、一八三—一九二頁。）、吉野作造への言及は特でない。

8 フリッツ・シュヴァイツァーはスイス系家系出身の人物で、アルベルト・シュヴァイツァーとは親戚関係にあるという。一九三六年に矢部貞治が訪ねたときには、セメント会社の重役をしていた（南原繁／蠟山政道／矢部貞治『小野塚喜平次——人と業績』（岩波書店、昭和三八年）、三九—四〇頁。）。

9 吉野作造のこの発言の直後、カミラ・イエリネックは女給としての酒場での労働を倫理的に問題視する記事を發表している。この投書には、論旨全てには賛成しかねるが掲載は喜んでするという編集部注記が添えられている（Camilla Jelinek, Die Kellerinnen, in: Frankfurter Zeitung und Handelsblatt, Nr. 325, 24. November 1910, Erstes Morgenblatt, S. 1, in: Barch N 1137/19.）。

10 「吉野法學士の歸朝」、『東京朝日新聞』大正二年七月三日（第九千六百七十六號）、三頁。

11 今野元「吉野作造の見た近代ドイツ——大正デモクラシーの一面として」、『年報政治学』掲載申請中。